HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈トマスの詩篇〉について
Author(s)	滝沢, 武人
Citation	基督教学, 7, 29-32
Issue Date	1972-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46281
Type	journal article
File Information	7_29-32.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

〈トマスの詩篇〉(Thomaspsalmen)について

滝沢武人

一

最近のグノーシス主義研究は、次のことを次第に明らかにしてきた。つまり、グノーシス主義は、キリスト教から派生・分裂・堕落して生じた単なる「分派」、「異端」ではなく、キリスト教以前に、少なくともキリスト教と同時代に、そして、キリスト教とは無関係に成立していたのである。このような非キリスト教的・前キリスト教的グノーシス主義を私は「原始グノーシス主義」と呼ぼうと思う。原始グノーシス主義の姿を解明するために用いることのできる直接史料は極めて少なく、いわゆる〈真珠の歌〉と〈トマスの詩篇〉、及び「ナグ・ハマディ文書」に含まれている一五ほどの非キリスト教的グノーシス主義文書である。ナグ・ハマディ文書の非キリスト教的グノーシス主義文書の中で、現在までに、そのテキストが出版されたのは『アダムの黙示録』のみである(ナグ・ハマディ文書と『アダムの黙示録』に関しては、荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』一九七一年、岩波書店、一五七―一九五頁を参照)。〈真珠の歌〉について、私は、不充分ながらすでに論じてあるので(『日本の神学』九、『宗教研究』二〇七、『基督教学』六)、以下においては、〈トマスの詩篇〉を取りあげようと思う。

二

〈トマスの詩篇〉は、一九三〇年に Carl Schmidt によって、エジプトの Medinet Madi において発見されたコプト語のマニ教詩篇集の中に含まれており、そのコプト語テキストと英語訳は、一九三八年、C. R. C. Allberry (*A Manichaean Psalm-Book*, II) によって出版された。このマニ教の詩篇集は、二八九篇の詩篇によってその主要部分が形成されており、それに続く詩篇群には、もはや番号が附されておらず、コプト語の索引にも載せられ

てはいない。

このことから、この詩篇集の編集者が、マニ教のある共同体の公の頌歌本である二八九の詩篇の後に、それらと類似した詩篇を捜してきて附加したのであろう、と考えられる。従って、〈トマスの詩篇〉の出所を、ただちにエジプトのマニ教集団に求めるべきではなかろう。T. Säve-Söderbergh (*Studies in the Coptic-Manichean Psalm-Book*, 1949) は、〈トマスの詩篇〉が、全体として、マニ教文献よりも、マンダ教文献に親密性を有していると指摘した。A. Adam (*Die Psalmen des Thomas und das Perlenlied als Zeugnisse vorchristlicher Gnosis*, *BZNW* 24, 1959) も、この点を更に詳細に展開した。〈トマスの詩篇〉が、最初期のマンダ教の共同体の一つと何らかの連関を有していたことは認められるべきであろう。しかしながら、その成立年代・出所・著者について明確なことは何も言えない。C. Colpe (Die Thomaspsalmen als chronologischer Fixpunkt in der geschichte der orientalischen Gnosis, in: *Jahrbuch für Antike und Christentum*, 7, 1964, S. 77–93) は、〈トマスの詩篇〉の著者をマニの弟子トマスと考え、成立年代をA・D・二五〇～二七五年と考えているが、ほとんど根拠もなく、説得力に乏しい。〈トマスの詩篇〉の「トマス」というタイトルは、やはり文学的虚構と考えるべきであり、この詩篇集の編集者が、その著者をマニの弟子トマスに帰せしめようとしたもの、と考えられる。

III

〈トマスの詩篇〉の原典は、アラム的なシリア語と考えられている。それは、二〇の詩篇から成り、全体は二つの部分に分けられる。第一～一三篇は「表題のある詩篇」であり、神話論的に語られ、より古い時代に属するものと考えられる。後半の第一四～二〇篇は「表題のない詩篇」であり、エンクラティス派的な現実世界に対する拒絶と禁欲がその支配的なテーマとなっている。非キリスト教的グノーシス主義の史料としては、第一～一三篇が重要であり、これらは、一貫して魂の救済がテーマであり、グノーシス主義的なものである。〈トマスの詩篇〉第一篇は、最も重要であり、Adam は、この第一篇を「萌芽的グノーシス主義の最初の文書」(das erstes

Dokument der werdenden Gnosis) と呼んで、B・C・二世紀の終り頃にはすでに成立していたと推定する。『ソロモンの知恵』との平行関係からのみなされているこの年代決定には疑問があるが、第一篇が、とにかくキリスト教以前のものであり、しかもかなり早い時期にまで遡り得るということは認められてよいであろう。パルティアの神話論を素材としているその物語は、全くグノーシス主義的な性格を有している。荒井献氏によれば、グノーシス主義の本質は、次の三つのモチーフから形成されるのだが（前掲書、三五〇頁）、〈トマスの詩篇〉第一篇は、それらの条件をすべて満たしていると思われる。すなわち、「反宇宙的二元論」(anticosmic dualism)は、天上の光の世界と深淵の闇の世界、光の子と悪の子の戦いで表わされている。現実世界は、「地獄」、「闇」、「深淵」であり、光に属するものは、それら悪霊の諸力の支配下に捕えられている。次に、「救済者」の割役は、「光の子」が見事に演じているし、「究極的存在と人間の本来的自己は本質において一つであるという救済の認識」は、この第一篇では、「至高者」なる父の認識であり、その父のもとに連れ帰られるということが、再び本来的な自己に帰るということなのである。

四

第二～一三篇は、いずれも、第一篇より後期に成立したものと考えられるが、その年代も決定することはできない。これらの詩篇の物語もすべてグノーシス主義的なものであり、更に非キリスト教的なものと考えれらよう。その中心テーマは、第一篇と同様に、人間の本来的自己であり「魂」の救済の問題であり、悪霊と闇の諸力から解放されて、再び本来的な光の父の国へ帰るべきことを物語っている。「救済者」の役割は、主としてやはり、「光の子」が演じている。

ここで注目しなければならないのは、第三篇一八節の次の句である。「彼は、遣わされた者を呼んだ。生命の小部屋、すなわち理性を」(Er berief einen Gesandten, eine Kammer des Lebens, nämlich die Vernunft, in: Adam, *op. cit.*, S. 7)。つまり、ここでは、「救済者」が「理性」(Vernunft)と呼ばれているのである。私は、『宗教研究』二〇七において、〈真珠の歌〉の救済者たる「手

紙」が「超越者」であると同時に「内在者」でもあることを示しつつ、グノーシス主義の「救済者」一般の性格が、ハイデッガーの『存在と時間』における「良心」(Gewissen)によって実存論的に解釈されるべきことを論じておいた。そして、このことは、〈トマスの詩篇〉のこの箇所からも明らかに支持されるであろう。〈トマスの詩篇〉においても、救済者たる「光の子」は、やはり人間の「良心」、「理性」と考えられているのである(更に五・二四を参照)。グノーシス主義における「救済」は、人間の「良心」、「理性」によって達成される「自己救済」であると考えられる。

五

さて、Adamは、〈トマスの詩篇〉の五・八～一一と、八・二四～二六の中には、「仮現説」(docetism)さえ見い出されると主張している。Adamのこの見解については、P. Weigandt (*Der Doketismus im Urchristentum und in der theologischen Entwickelung des zweiten Jahrhunderts*, 1961)や荒井献氏(前掲書、三二五―三二七頁)が批判しているように、「仮現説」を認めるべきではなかろう。「仮現説」は、グノーシス主義がキリスト教と接触してはじめて生じたものであり、グノーシス主義の中心的な特徴とは言えない。従って、前キリスト教的な〈トマスの詩篇〉の中に「仮現説」が存しないのは当然であるし、それが存していないからといって、〈トマスの詩篇〉がグノーシス主義に属するものではないと考えるべきでもない。

六

〈トマスの詩篇〉は、前キリスト教的なグノーシス主義文書であり、その物語には、グノーシス主義の本質を形成するモチーフがすべて含まれていると考えられる。この詩篇からも、グノーシス主義が、少なくともキリスト教とは独立して存在していたことは明らかであろう。そして、そのような、キリスト教と接触する以前の「原始グノーシス主義」の姿は、ナグ・ハマディ文書に含まれている非キリスト教的グノーシス主義のテキストが、今後次々と出版されていくにつれて、明らかなものとなっていくだろう。